

．水稻

現況

1．出穂期

ハナエチゼンでは早いところで7月12日頃から出穂が始まり、出穂期は7月15日頃からであった。連休田植えでの出穂期は、早い地域では7月15日頃から、大部分の地域では7月17～18日、山間地では7月20日前後であった。5月中下旬移植では、7月25日前後の出穂期となっている。

コシヒカリでは、早いところではすでに7月24日頃に出穂期となっているが、大部分の地域では連休田植えで7月28日～月末にかけての出穂を予想している。遅植えや山間地では8月5日前後、直播栽培では地域や播種時期によって8月3日～15日頃の出穂期と予想されている。

特にコシヒカリでは、幼穂形成期の圃場によるばらつきが大きく、出穂期のばらつきも大きいと見られる。移植時期がほぼ同じでも、5月の低温期の活着や初期生育の良否がその後の発育にも影響した結果とみられる。総じて近年10年間の平年値に近い7月29日頃の出穂期と予想される。

2．生育状況

草丈は、県内各地でコシヒカリを中心に長く、110cmを上回る場所もある。また、下位節間長(N_3+N_4)が20cmを上回る場所や、第3葉身長(B_3)が50cmを上回る場所など、倒伏に密接に関連する部位の伸長が目立つ。特に若狭地域や遅植え、直播で顕著である。ハナエチゼンでも平年並からやや長めである。

茎数は、地域や圃場によって傾向を異にしている。ハナエチゼンでは平年並からやや多いとする地域が多く、500本/㎡以上の穂数を予想している圃場もある。一方、コシヒカリではおおむね平年並であるが、一部地域では多めである。遅発分げつが十分に整理されていない直播や遅植えでも、おおむね平年並～やや多めである。

葉色は、ハナエチゼンでは平年並～やや濃く、コシヒカリではほぼ平年並である。ただし、葉色の濃淡が他より顕著な圃場もある。コシヒカリについては、今月初めより草丈が長く倒伏の可能性が高いと報告してきたことから、穂肥の施用量は少ない。しかし、坂井町を除いて倒伏軽減剤の積極的施用は行われていないようである。

3．病害虫

1) 病害

7月下旬の葉いもちの発生面積は137haで、平年の7,820haに比べて著しく少ない。一方、「あとでき」気味の生育により、紋枯病の発生面積は4,108haで、平年の2,059haの2倍とかなり多い。白葉枯病も、一部地域で発生が認められている。

2) 虫害

斑点米カメムシ類の生息密度は依然として高く、カスミカメ類よりもトゲシラホシカメムシの発生数が多い。

イネアオムシ、ニカメイチュウの発生は、平年より多く前年並である。

コブノメイガの発生は前年並、ウンカ・ヨコバイ類の発生は少ない。

対策

1. 水管理

間断灌漑を収穫5日前まで徹底することが、良質米生産の大きなポイントである。

- 1) 夏期の圃場からの蒸発散量は、1日あたり7mm程度であるが、フェーン現象など高温、乾燥、強風が著しい場合には20mmにも達する。このため、3日に1回程度の灌水が必要であり、フェーン時には一時的に湛水する。灌水に当たっては、排水路側まで見回りし、土が白く乾くことのないように均一に水が行きわたるようにする。
- 2) 水不足地域や干ばつが予想される地域では、地域内で話し合い、水系別の計画的な配水や節水、取水制限、排水の再利用等を検討する。また、水田の畦畔や水尻部からの漏水がないよう、止水対策を十分にする。
- 3) 干ばつ時に海水遡上による塩類濃度障害が発生する地域では、ECで3mS/cm以下、塩素濃度では1000ppm以下を取水の目安とする。しかし、緊急の場合には上記の約2倍の値を目処に、稲の生育状況やその後の天候を考慮して灌漑の判断を行う。

2. 病害虫防除

- 1) 穂いもちは、出穂期前後に雨が多いと発生しやすいので、出穂直前と穂揃期の2回、粉剤で防除する。
- 2) 紋枯病の病斑が上位葉鞘に進展しやすい条件であるので、穂ばらみ期と穂揃期の2回、粉剤で防除する。前年発生が多かった圃場、茎数が多い圃場、葉色が濃い圃場では必ず防除する。また、倒伏のおそれがある圃場や発病株率が早生で10%以上、中生で20%以上ならば必ず防除する。
- 3) カメムシ類の防除に当たって、地域の優占種を確認しておく。防除時期は、カスミカメ類は穂揃期、トゲシラホシカメムシやホソハリカメムシは傾穂期から乳熟期が第1回目防除時期である。第2回目防除時期は糊熟期初期とする。発生数が多い場合には収穫7~14日前にもう一度防除が必要である。
カメムシ類の種類によって薬剤の効果が異なるので注意が必要である。種と薬剤の関係については防除指針を参照にする(p24)。スタークル、アルバリン粒剤は、出穂後7日に湛水して散布する。本年はクモヘリカメムシの発生が確認されている。粒剤の効果は不良で、MRジョーカーの効果が高いといわれている。
- 4) ニカメイチュウの防除適期は8月初めである。イネアオムシも過繁茂圃場や直播、遅

植え圃場では要注意である。

第1表 近年の出穂期と登熟日数、気温（ハナエチゼン）

年次	出穂期 (月日)	刈取開始期 (月日)	登熟日数 (日)	積算気温 ()	平均気温 () 登熟期間 +20	平均日射量 (MJ/m ² /日)	全籾数 (百粒/m ²)	収量 (g/m ²)	
2001	7.16	8.14	29	816	28.1	28.4	21.5	284	581
2002	7.19	8.20	32	934	28.3	28.8	19.5	288	609
2003	7.21	8.25	35	892	25.5	25.4	15.1	300	604
2004	7.16	8.14	29	814	28.1	28.2	20.4	310	624
平均値			31	864					
平年値	7.22	8.28	37	955					

注) 農試気象対策試験データ。

3. 適期刈り取り

出穂後の積算気温によりおおよその収穫時期の目安をつけ、水分の低下や籾の黄化程度により適期に刈り取る。ハナエチゼンの刈取開始期までの積算気温は、近年の実勢にあわせて本年より暫定的に 860 とする(第1表)。これは、平年の気象条件で出穂後 32 日で刈取開始期に達する気温である。コシヒカリの積算気温は、従来通りの 990 とする。

ただし、高温年次の登熟の進行は、籾や枝梗の黄化が進み籾水分の減少程度が極めて早くなるのに、穂軸の黄化は緩慢であるため、刈取時期を逸しやすい。籾水分が 20% 以下になると立毛中の胴割が多発し、品質が低下するので注意する。また、根の張りが悪いイネでは下葉の枯れ上がりが早く、少ない積算気温でも刈取開始期に達するので、中干しが十分行えなかった圃場では注意が必要である。

フェーンなどで籾が褐変すると茶米が多発しやすい。また干ばつ田では稲体組織が弱くなり、倒伏が助長され、籾水分の減少程度が大きくなるのでやや早めに収穫する。いずれも品質低下が著しい場合は仕分けする必要があるので、収穫の前に試し摺りして確認し、別収穫する。

4. 乾燥調製

- 1) 急激な乾燥は避ける。1 時間当たりの水分減少(乾減率)は 0.8% 以下とし、それ以上温度を上げない。通常は乾燥機の張り込み量に応じた設定とすれば、あとは確認するだけで良い。
- 2) 玄米の仕上げ水分は 15.5% を目標とし、過乾燥にならないよう注意する。高温期に乾燥調製する早生では、乾燥終了後の貯留中でも条件次第でさらに乾燥が進むので、あらかじめやや高め的水分で仕上げしておく必要が生じる。しかし、青米が多いと貯留中に水分の“戻り”が生じるので、8% 以上もの青籾があれば乾燥終了時の水分は 0.5% 程度低めに設定する。
- 3) できるだけ 2 段乾燥を行う。
- 4) 籾摺り作業は早くても乾燥終了から 2、3 日後とし、籾が完全に常温に戻り、水分ムラがなくなってから行う。